季刊
vol. 218
NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館　〒467-0806　名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL(052)853-2655　FAX(052)853-3636　http://www.museum.city.nagoya.jp
平成28(2016)年7月1日発行　(年4回1・4・7・10月)
3,800部発行　無料
古紙パルプ配合再生紙使用

西暦79年８月24日、イタリアのヴェスヴィオ火山が噴火し、ポンペイを含む周辺の各都市は火砕流や火山灰に飲み込まれました。この悲劇は一方で、都市まるごとを当時の姿そのままに保存し、古代ローマ時代の豊かな暮らしぶりを今に伝えています。とりわけ邸宅や別荘をいろどった壁画は注目され、神話における神々の姿、壮麗な宮殿、風景や動植物をいきいきと描きだし、そのきらびやかさは我々の目を惹きつけ離しません。今回の展覧会では、様々なポンペイ出土品のなかでも、壁画に焦点を当て、古代ローマの美にせまります。また当時の空間を再現して展示することで、古代ローマ人の生活を皆様に追体験していただきます。本邦初公開を含む素晴らしい壁画の数々をご堪能ください。　(横尾拓真)

展覧会情報

特別展 日伊国交樹立150周年記念

世界遺産 ポンペイの壁画展

会　　期■平成28年７月23日（土）～９月25日（日）
開館時間■午前９時30分～午後５時
（入場は午後４時30分まで）
休 館 日■毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、第４火曜日
主　　催■名古屋市博物館、中日新聞社、CBCテレビ
観 覧 料■一般 1,300（1,100）円／前売ペア（2,000）円
高大生 900（700）円／中学生以下 無料

※（　）内は団体・前売料金。ペアチケットは前売のみの販売。団体は20名以上。名古屋市交通局の一日乗車券・ドニチエコきっぷを利用して来館された方は100円割引。身体等に障がいのある方は手帳の提示により、本人と介護者の２人まで当日料金の半額。

曹洞宗の二つの本山

二つの本山

この秋、名古屋市博物館では特別展「禅の心とかたち　總持寺の至宝」を開催します。總持寺は神奈川県横浜市にある曹洞宗の大本山で、この展覧会は曹洞宗の太祖と呼ばれる瑩山紹瑾の七〇〇回遠忌と、その後継者峨山韶碩の六五〇回遠忌を記念して開催されるものです。

さてここまでで、曹洞宗の檀家以外の読者の皆様の脳裏には？マークが点滅しているかもしれません。あれ、高校の日本史では、曹洞宗の開祖は道元、中心寺院は永平寺と習ったような…。実は曹洞宗には、祖とされる師が二人、大本山もまた二つあるのです。たしかに、禅宗の一派である曹洞宗の教えを日本に伝えたのは道元で、彼の開いた永平寺（福井県永平寺町）もまた曹洞宗の大本山です。瑩山は道元の曾孫弟子にあたり、總持寺は瑩山が開いた寺です。ではなぜ道元よりかなり後の世代の瑩山が祖と呼ばれ、永平寺より新しい總持寺が大本山なのでしょうか。

曹洞宗太祖瑩山禅師

瑩山は文永元年（1264）、越前国に生まれ、永平寺で出家して、永平寺三世の徹通義介に学びました。師の義介は臨済宗も学び、宋に留学して最新の禅文化を学んできた知識派でした。瑩山も青年時代に永平寺を出て諸国を修行し、臨済宗や天台宗を学んでいます。

義介は道元が逝去した後の永平寺を大きく改革しようとして兄弟弟子の義演ら保守派の反発に遭い、争いを避けて大乗寺（石川県金沢市）に移りました。瑩山も師の片腕となって、大乗寺の整備にあたり、義介が逝去すると大乗寺の二世を継ぎ、後継者となりました。瑩山の教えの特徴は、民間信仰や祈祷を否定せず、禅の修行の中にくみ込んで、積極的に民衆への布教に取り組んだことにあります。瑩山は永光寺（石川県羽咋市）・城満寺（徳島県海陽町）など各地に曹洞宗の寺院を建立し民衆を教化してゆき、元亨元年（1321）には真言宗と律宗の寺院であった諸嶽寺（石川県輪島市）を禅の道場に改め、總持寺と名付けたのです。以後、瑩山の弟子達はここを本拠地として各地に教線を広げていきました。現在、全国に曹洞宗の寺院は約14,000寺ありますが、そのおよそ９割が瑩山から広がった系統だといいます。このため日本に曹洞宗を伝えたのは道元、教えを広めたのは瑩山と言うことで、道元を高祖、瑩山を太祖と仰ぐこととなりました。

永平寺と總持寺

一方の永平寺では、義介を追いやった件で後援者である越前国の豪族波多野氏の援助を失い、保守派は衰えました。義演のあとは別系統である宝慶寺（福井県大野市）の義雲を住持として迎え、義雲の後継者達により、若狭国の世俗とは隔絶した山中にあって孤高を保っていました。しかし16世紀に入ると積極策に転じ、本山としての権威を主張するようになり、總持寺との対立が生じてしまいました。江戸時代から明治にかけて時の権力者の宗教政策にも影響されて、全国の曹洞宗寺院が総本山として仰ぐべきなのはどちらなのか、長年争われましたが、明治５年（1872）明治政府の仲介により、法の系統の本山である永平寺と寺院の系統の本山である總持寺とが両立する二大本山制が確定しました。

なお、禅宗のもう一つの主要宗派である臨済宗は、寺院の系統別に妙心寺派・南禅寺派など14派に別れており、別々の大本山を仰いでいます。曹洞宗も明治24年から27年にかけて、總持寺による分離独立運動が起きましたが、結果的には雨降って地固まり、両本山が両輪となって宗勢を高揚することとなり、現在に到ります。

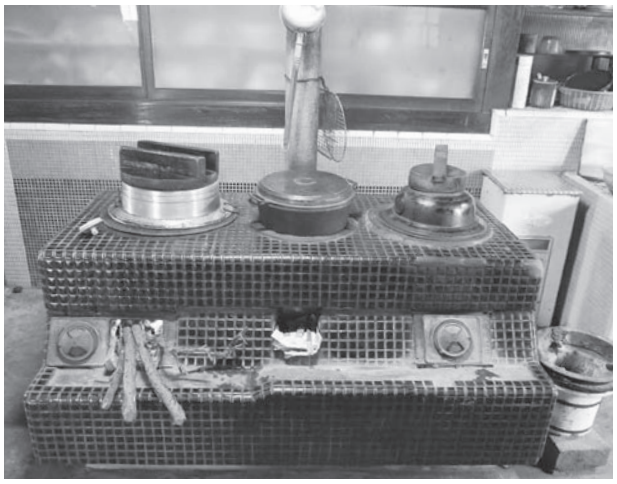
總持寺の至宝

本山問題が解決したのもつかの間、總持寺は明治31年（1898）に火災で伽藍の大半を失いました。この禍を転じて福と成すため、東京近郊への移転を計って、明治44年に現在地に移り、大正年間に伽藍を整備しました。現在も残る衆寮という建物は、大須の万松寺から移築されたものです。そして石川県の旧地には總持寺祖院が再建されました。

總持寺の寺宝はこの火災で失われたものもありますが、横浜に移転してから大隈重信や五島慶太といった著名人らから多くの美術品が寄進され、現在所蔵する宝物は頂相や水墨画といった禅宗美術に限らず、密教美術や近代日本画など多彩な様相を示しています。これもまた、瑩山以来のおおらかな宗風の表れではないでしょうか。　（山田伸彦）

特別展「禅の心とかたち　總持寺の至宝」
平成28年10月15日（土）～11月27日（日）
詳細は10月発行の次号とホームページにて

奥三河の竈を訪ねて
用の美



昭和30年頃に造った竈

某月某日
Q氏「竈（かまど）がどうしたって？」
本館「写真を撮らせて頂きたいのですが？」
Q氏「……？ま、いいけど…」

別の某月某日
本館「竈に火が入ると写真が活きるんですけど…。」
Q氏「お湯でも沸かすかね？」
本館「できれば、ご飯が炊きあがるまでの動画も…。」

また別の某月某日
Q氏「それじゃあ、ご飯を食べていくかね？」
本館「いいえぇ、そんなぁ。でも、ご馳走さまです！」
Q氏「家の漬け物は評判がよくてねぇ。」

またまた別の某月某日
本館「いよいよ撮影にお伺いしたいのですが…。」
Q氏「本当に漬け物しかないよ。」
本館「十分ですよ。それにみそ汁でもあれば…。」

というわけで、さらに別の某月某日、愛知県北設楽郡東栄町の山の中腹に民家が点在する小さな集落にQさん（80歳）のお宅を訪問しました。竈の写真、ご飯が炊きあがるまでの動画の撮影（と、竈でたいたご飯）が目的でした。

上の写真が東栄町の名峰明神山を南に望むQさん宅の竈です。昭和30年（1955）頃に東栄町内の左官屋さんに造ってもらったものです。このタイプの竈を造ったのはこの集落ではQさん宅が最も早く、その後何軒かのお宅で同じ左官屋さんに造ってもらったといいます。Qさん宅では今も現役です。毎日、竈に火を入れて使い続けているそうです。

昭和30年からということは60年を超えて使い続けているということです。60年！ 60年使い続けることを念頭に炊飯器や調理台を開発しているメーカーが今の我が国にあるでしょうか？ 60年使い続けられたとは思えない竈の状態の良さに唖然とするばかりでした。毎日使うばかりではなく、Qさんが手入れを怠らなかったことの証しでしょうか。と同時に、竈と３種の釜や鍋の組み合わせの妙にも目を見張りました。「民芸」はこんなところにも見いだせると教えられました。

Qさんの自宅周辺に点在する田畑を見るときにも「用の美」ということばを思い起こします。どの田も、どの畑も手入れがゆきとどき、「ぴかぴか」なのです。さらに、Qさんの家の裏手にある薪小屋を見て驚きました。樹の種別や乾燥の度合い、長さ太さごとにと区分した薪を整然と積み上げた美しさ。若い頃に茨城県へ農業の勉強にいった時期を除いて東栄町で農業を続けてきたというQさん。働く手を休めることができないQさんの暮らしぶりを彷彿とさせる、そんな調査ができた一日でもありました。

はじめの十数行に要約したお願いを重ねた期間はおよそ半年あまりでした。それはそれで楽しかったQさんとの遣り取りを思い出しながらの竈で炊いたご飯はやはり格別です。もっとも、Qさん曰く「今日のご飯は今一つ…。」とのことでしたが。

Qさんは９年物の奈良漬けをはじめ３種の自家製漬物を用意してくださったばかりか、自宅の畑でとれた野菜たっぷりの白味噌ベースの鍋まで。その美味しかったこと。鍋の下の方にゆで卵がいくつも入っていました。それを見つけた時のうれしかったこと。そうですよね、卵はやはりご馳走ですよね、Qさん！

（竹内弘明）

きちんと整理されている薪小屋

◉特別展

世界遺産ポンペイの壁画展

La Pittura Parietale Romana a Pompei

奇跡の町ポンペイ

ヴェスヴィオ火山の噴火により火砕流および火山灰に埋もれた町ポンペイ。18 世紀にその発掘が始まって以来、人々の関心を強く引いたのは、あざやかな色が残る壁画でした。長く伝えていくことが難しい絵画が、しかもルネサンス以来古典として仰がれた栄光の古代芸術が、数多く発見されたのです。ギリシア神話の英雄や女神たち、壮麗な宮殿、身近な動植物、美しい庭園や海浜の風景、あらゆる主題がいきいきと描かれており、発見当時の人々の驚きと感動は計り知れません。興奮と熱狂につつまれた宝探しの後、学術的調査が進展し、現在、発掘された壁画はギリシア・ローマ時代の絵画史を考えるうえで欠かせない資料となっています。そこには西暦 79 年までの歴史が閉じ込められており、絵画や装飾の流行がどのように変遷していったか、足跡をたどることができます。加えて、描かれた当時の姿そのままに残されていたので、どういった建物あるいはどういった用途の部屋に、どんな主題がどのような技法で描かれたのか、個々の壁画に託された意味を探ることもできました。地中海世界全域を支配した強大なローマ帝国。国家の繁栄を背景に生活を謳歌した古代ローマの人々。感性を磨き思想を深め驚くべき文化の成熟を成し遂げた彼らの生活様式がありありと理解できるようになったのです。

古代ローマ最高峰の美

《赤ん坊のテレフォスを発見するヘラクレス》
ナポリ国立考古学博物館蔵
©ARCHIVIO DELL'ARTE - Luciano Pedicini / fotografo
皇帝を顕彰するために建てられたと考えられているエルコラーノのバシリカ（列柱廊をともなう集会施設）から出土した作品。ギリシア神話の英雄ヘラクレスが自身の息子テレフォスを発見するシーンが描かれています。ギリシア神話はポンペイの壁画において最も多く描かれた題材のひとつであり、鑑賞者の教養を誇示するものでもありました。構図・描写ともに充実した古代ローマ時代の絵画を代表する作品です。

よみがえる古代の美の空間

カルミアーノの農園別荘
（壁画を一連の空間装飾として再現した展示イメージ）
写真提供：Altritaliani
ポンペイ近郊のカルミアーノ地区で発見された壁画。壁画が描かれていた建物は葡萄酒の生産拠点として使用されており、壁画には酒神ディオニュソスに関する主題が描かれました。本展では、壁画を立体的に展示し、トリクリニウム（食堂）の一室を再現します。日々饗宴が繰り広げられた場所で、古代ローマ人の豊かな暮らしぶりを実感してください。

古代の美につつまれて

日伊国交樹立 150 周年を記念して開催される今回の展覧会は、過去のポンペイ展とは異なり、様々な出土物の中から壁画に的をしぼって構成されています。時代や様式の異なる壁画を体系的に理解し、また描かれた内容に踏み込みながら古代ローマ時代の人々の美意識にせまることを目指します。なかでも≪赤ん坊のテレフォスを発見するヘラクレス≫は日本初公開となる作品で本展の目玉。皇帝を顕彰する建築物に飾られていたとされ、無名の職人が手がけた他の多くの壁画とは一線を画す、最高水準の美を間近に見ることができます。また「カルミアーノの農園別荘」については、当時の空間を再現して展示します。美しい絵画につつまれながら、古代ローマの人々の生活を想像してみてはいかがでしょうか。総点数約 80 点、壁画づくしの名古屋市博物館をご堪能ください。

自由に舞い踊る美しき女たち

《踊るマイナス》部分
ナポリ国立考古学博物館蔵
©ARCHIVIO DELL'ARTE - Luciano Pedicini / fotografo

優雅に飛翔するマイナスを描いた作品。オリーブの冠を被り、右手にはタンバリン、左手にはテュルソス（松かさのついた杖）を握る。マイナスは酒神ディオニュソスに付き従う女性の信者で、しばしば単独でも描かれました。その美しい姿は、遺跡発掘後、18 世紀の人々をも魅了します。その結果、本作のように壁画全体からマイナスの部分のみが剥がされ鑑賞されることもありました。

おかしな二人

《ヘラクレスとオンファレ》部分
ナポリ国立考古学博物館蔵
©ARCHIVIO DELL'ARTE - Luciano Pedicini / fotografo

ヘラクレスと女王オンファレの胸像。神託によってオンファレの奴隷となったヘラクレスは彼女の意のままに振り回されます。余裕の笑みを浮かべるオンファレと、どことなく情けない表情のヘラクレス。両者の対比が面白い作品です。可笑しみを交えた親しみやすさもポンペイの壁画の特徴でした。

神々のレッスン

《ケイロンによるアキレウスの教育》
ナポリ国立考古学博物館蔵
©ARCHIVIO DELL'ARTE - Luciano Pedicini / fotografo

《赤ん坊のテレフォスを発見するヘラクレス》と同じくエルコラーノのバシリカより出土した作品。青年アキレウスにキタラ（竪琴）の弾き方を教えるケンタウロスのケイロンが描かれています。音楽の神ヘルメスの発明したキタラは最も高貴な楽器としてローマの人々にも尊ばれました。老成した賢者ケイロンは麗しい青年アキレウスに寄り添いながら、優しい眼差しを投げかけ、キタラの指導を施しています。

名古屋市博物館　特別展
日伊国交樹立 150 周年記念
世界遺産 ポンペイの壁画展
7月23日（土）～9月25日（日）

詳しくは、ポンペイの壁画展 名古屋 検索
http://www.chunichi.co.jp/event/pompei/

終戦後に亡くなったふたり

それは一本の電話から

昨年夏、三重県の小学校の先生から電話がありました。「正木（まさき）国民学校（今の中区：正木小学校）の学童疎開資料がそちらにあると聞いたのですが…。」

学童疎開とは、先の大戦中、戦況の悪化によって空襲の危険がさし迫ってきた都市部から、学童（３～６学年が基準）を空襲の恐れの少ない農村部に学校単位で集団避難させた全国的な政策のことです。

名古屋市博物館は「正木国民学校学童疎開関係資料」を所蔵しています。これは、疎開先現地の本部主任だった教員が自宅で保管され､昭和52年（1977）に開館当初の当館に寄贈された、名簿から小さなメモ書きの紙片に至るまでが綴じられた書類です。

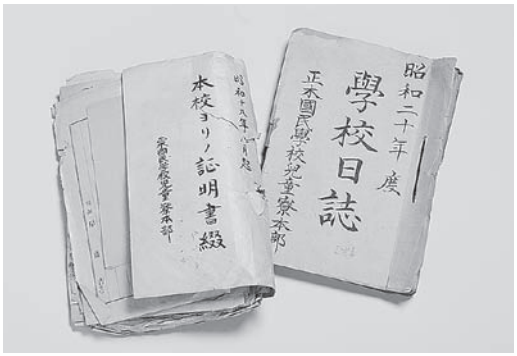
さて、電話の声は松阪市立豊地小学校のK先生。豊地国民学校には戦時中、昭和19年（1944）夏から21年（1946）冬にかけて、正木国民学校が集団疎開していました。K先生は「『愛知県教育史』所収の教師の日誌で、終戦後９月になって、共に４学年の男子児童（Ｉくん）と女子児童（Yさん）が亡くなったことを知りました。その経緯を詳しく知りたいのです。」とおっしゃいます。豊地小学校では、戦争中に名古屋の小学校が避難して来て一緒に暮らしていたことを、５年生の学習で活用している、とのことでした。

疎開中の正木国民学校で亡くなった児童がいたことは私もこの本で知ってはいましたが、それが終戦後だったことは意識していませんでしたし、残された資料からどこまで詳しいことが提供できるのだろうか、と不安に思いながら電話をきりました。

資料を全部めくってみる

昭和20年（1945）の『学校日誌』（写真右）９月の項には、ふたりの死亡の簡単な記事があります。６日にＩくんが小児急性腸炎で、そして12日にYさんが赤痢で亡くなったこと、いずれも翌日遺骨と共に教員が名古屋に向かったことだけが記されています。不衛生・栄養不良の１年間の疎開生活の末、疎開の解散決定まであと半月足らずのことです。

校長のいる名古屋の本校（校舎は昭和20年５月の大空襲で焼失)発行の面会許可書などが綴られた『本校ヨリノ証明書綴』（写真左）には、医師による診断書も数多く綴じ込まれています。手始めにこの綴りの、ぼろぼろでちぎれそうな紙を１枚１枚最後まで



『学校日誌』と『本校ヨリノ証明書綴』

めくりましたが、ふたりの名は出てきません。

そこで他の綴りを次々に見ていくと、『疎開児童疾病状況書類綴』という三重県内政部長への報告書の束の中で、ようやくYさんの死亡診断書の写しを見つけましたが、Ｉくんの病気についてのものは何も見つかりません。しかしこうして、個人としての児童の名をひたすら追いかけるうちに、集団の疎開資料として見てきたこの資料が、ひとりひとりの児童・家族そして教師の生きざまの塊なのだ、という思いが湧きあがってきました。

Ｉくんのご遺族との出会い

K先生のご紹介で、この疎開を上級生（６学年）として過ごされたHさんが来館され、その体験を聴くことができました。やがて、このHさんのご記憶とご尽力によって、Ｉくんのご遺族（姉）が正木小学校近くに戦後もずっとお住まいであることもわかりました。お姉さんは、Hさんが初めて尋ねて来た時「死んだ弟のことで訪ねて来てくれて本当にありがとう。」と言われたそうです。後日、お姉さんたちが博物館を訪ねてこられました。Ｉくんは３人の姉の末っ子の弟としてとてもかわいがられたこと、病状が悪化したＩくんのもとに親御さんが駆けつけることができたこと、そこでＩくんと交わされたわずかな会話などを、私も聴くことができました。

フリールームでは、面会・帰省といった名古屋との往来に関する書類を中心に、児童と家族一人一人に関心を寄せつつ、正木国民学校の疎開生活をひもといていこうと思っています。会期中の８月27日（土）には、"はくぶつかん講座"で皆さまにお話しをする機会もありますので､ぜひお出かけください。

（加藤和俊）

フリールーム －正木国民学校の疎開－
平成28年７月27日（水）～ ９月25日（日）

〈猿猴庵の本〉編集余録
『東街便覧図略』出版始末

いったい、江戸へ着けるのはいつ？

高力猿猴庵のユニークな絵入り記録を、原寸大のカラー写真版で紹介する〈猿猴庵の本〉シリーズ。2001年にスタートして、今年は16年目。この春には第22回配本を刊行しました。このシリーズの先頭バッターは『東街便覧図略』。東海道の旅で取材した風景や風俗を、独自の視点でまとめあげた猿猴庵の代表作です。全７巻の大作、まずはその巻一を第１回配本としました。巻一には、熱田（名古屋市）から今切の渡（静岡県湖西市）が含まれていますので、愛知県内は巻一がカバーしています。引き続いて巻二を、とも考えたのですが、猿猴庵には名古屋の出来事を扱ったユニークな作品が多く、『東街便覧図略』にばかり力を注いでいると、そちらを待っている方をかなりお待たせすることになってしまいます。というわけで、第10回配本までは名古屋もの、尾張ものを優先して刊行しました。

それでも『東街便覧図略』を忘れていたわけではありません。第11回、第17回、第20回、そして今回の第22回と、ポツリポツリではありますが塁を進め、ようやく三島神社（静岡県三島市）までたどり着きました。あと残りは２巻。それなのに、すでに第１回配本の巻一は売り切れ（喜ばしいのですが）、全巻揃えたいという方からは、復刊のご希望もちらほら（有り難いです）。しかし、まずは江戸に向かいたい。でもしかし、いったい、いつになったら江戸に着けるのでしょう。

旅の顛末

そもそも、猿猴庵が江戸へ発したのは天明６年（1786）の10月13日、今からちょうど230年前のことです。行きに８日、帰路に９日を費やしていますので、東海道を歩いていたのは実質17日間。この時がそもそもの始まり、とは言うものの、完成を見たのは何と９年後の寛政７年（1795）。31歳だった猿猴庵は、40歳になっていました。つまり、30代のほとんどをかけて、『東街便覧図略』の執筆をしていたわけで、猿猴庵にとっての本当の旅は、旅が終わった後に始まったのだと私は思っています。

30代の猿猴庵とつきあう

博物館で仕事をしていると、吉田兼好言うところの「見ぬ世の友」というのに出会います。もっとも、相手には選択の自由がないので申し訳ないのですが、私にもその「友」がたくさんできました（勝手につくりました）。中で最も古いつきあいになるのが猿猴庵。猿猴庵は宝暦６年（1756）生まれですから、ざっと200歳ほど年上。最大の敬意を払ってはいますが、『東街便覧図略』を読んでいるときは、30代、つまり年下の「友」としてつきあっています。そしてしみじみ思うことは、尾張藩のオサムライの博覧強記ぶりは侮れない、ということ。年下ながら、敬服し、学ぶことばかりなのです。

具体的に申しましょう。

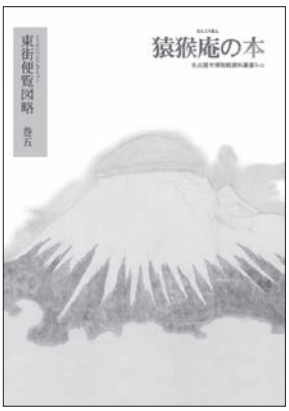
その一は、読書量の多さです。『東街便覧図略』を読み解くにあたり、引用文献一覧というのを作成しているのですが、軽く200点を越えています。原典を参照しようと思っても、容易には手の届かない本もあり、そのすごさに舌を巻いています。猿猴庵の蔵書を貸してほしい、と思うことしきりです。

その二は、描写の細密さ。猿猴庵は「細画家」の異名をとったほどですから、どの作品にも細部へのこだわりが見えますが、『東街便覧図略』は格別。絵の方は感嘆するばかりですが、文字の方もまた飛び抜けた細かさ。私の老眼が進んだのはこの「友」のせいだと、恨めしく思わないでもありません。

ともあれ、『東街便覧図略』の編集は一筋縄ではいきません。筆は速いと思われる猿猴庵でさえ９年もかかったのですから、出版に時間がかかるのはどうぞ大目に。しかしそれにしても、江戸へはいつ？

あと２年、お待ち下さい

今年度と来年度に残りの２巻を仕上げるつもりです。箱根の関を越えて、品川へ。もうしばらく、30代の猿猴庵と旅をします。　（山本祐子）



最新刊『東街便覧図略』巻五（第22回配本）

「柚木」（富士市）から「三島大明神」（三島市）まで。富士山の魅力満載。
現代語訳付き。
１冊1,200円

新収資料紹介
足立喜六資料

このたび、愛知県に所縁があり、教師にして中国史跡の研究者として名を残す足立喜六氏の関係資料を、同氏の孫娘である鶴田温子氏より一括受贈した。足立喜六氏の資料は、近代日・中における歴史遺産の記憶を今に伝えるきわめて貴重な基本資料である。

足立喜六略歴

足立喜六は、土木技術者、数学の専門家。1871（明治４）年、静岡県磐田郡袖浦村（現磐田市）生まれ。1898年（明治31）年に東京高等師範学校（現・筑波大学）を卒業。近代的な教育改革を計画した中国清朝政府から招聘され、1906（明治39）年～1910（明治43）年の４年間、陝西省西安の陝西高等学堂で数学・物理の教鞭を執った。

西安は、かつて前漢から隋・唐にわたる中国歴代王朝の都・長安であった都市である。足立は中国史の研究に関心を抱き、西安滞在中に自ら長安とその周辺地域の史跡・遺跡を現地踏査した。調査したのは漢代・唐代の陵墓、漢・唐長安城およびそれに関連する寺院・石碑・名勝などである。足立はその調査にあたりガラス乾板や暗箱カメラで写真を撮影し、自身の土木・数学・物理学の技術や知識を活かして測量をおこなうなど、当時としては最も早く近代科学的方法により記録を残した。

足立が帰国後に長安の史跡調査の成果と記録を一書にまとめ上げた『長安史蹟の研究』は、1933（昭和８）年に東洋文庫から出版され、当時の昭和天皇に献上された。同書には本文とともに写真171点・挿図38点が収められる。清朝末期における漢・唐代長安の史跡に関する実態が詳細に記録され、現在では失われ、あるいは様相を変えてしまった貴重な情報も知ることができる。中国の歴史的文化遺産の研究と継承に欠くことのできない、名著かつ重要な基本文献であり、初版の後も2006（平成18）年にいたるまで数度にわたり重版と復刻を重ねている。

晩年は現在の名古屋市千種区に住まい、1930（昭和５）年に愛知県立一宮高等女学校校長を定年退職した後は、長安・シルクロードの研究をライフワークとし、『大唐西域記の研究』を出版、『大唐西域求法高僧傳』『入唐求法巡礼行記』『法顯傳』の訳注書を刊行するなど、重要な著作を次々に発表した。1949（昭和24）年に永眠。墓所は千種区・日泰寺。

足立喜六資料の内容

受贈した足立喜六資料は主に、ガラス乾板写真、紙焼き写真、拓本、原稿類、叙勲表彰状、掛軸、書籍などからなる。いまだ資料整理中であるため資料の同定や内容の詳細を明らかにしえていないが、概要を紹介しておきたい。

ガラス乾板は、著書『長安史蹟の研究』に収録された写真の一部の原版である。1914（大正３）年に盗難に遭い現在はアメリカ・ペンシルバニア大学博物館と中国･西安碑林博物館に分かれて所蔵される、「昭陵六駿」（唐太宗李世民の陵墓・昭陵を飾った駿馬の図像の石彫レリーフ）の盗難以前の姿、則天武后母楊氏の陵墓・順陵の石獣や西安城など主要な史跡の往時の姿が撮影されており、多くの貴重な写真を含む。ガラス乾板の状態はやや劣化がみられるもののおおむね良好である。紙焼き写真もまた同書収録写真が大半を占める。拓本は漢代の画像石、唐代の墓誌や石碑などで、やはり同書に掲載されたものを含む。

他に足立が執筆した著書の手稿や校正刷からなる原稿類、『長安史蹟の研究』献上時の宮内大臣湯浅倉平からの受領状、叙勲表彰状や足立の経歴書などがある。それらからは教育や研究に力を尽くしてきた足立の人となり、業績・経験をうかがうことができ貴重である。

以上、小文ではごく概略ながら足立喜六とその業績、受贈資料の概略を紹介した。アジアにおける文化遺産への早期のまなざしを知りうる重要な同時代資料として今後活用されるものと期待できる。足立喜六資料の展示公開を目指して、目下、資料整理を進めている。資料の詳細な内容を把握次第、再度報告したい。（藤井康隆）

足立喜六資料（一部）